

「不動産屋なら不動産で稼げ」

「管理職なら管理職らしくあれ」

「今さら方向転換は無責任だ」

この思い込みが、人を壊す。変化に適応できないのではない。適応してはいけないと
思い込まされているだけなのだ。本業を、人生の主戦場と考えないほうがいい。そうで
なければ、人は持たない。とりわけ現在は、リストラや倒産、希望退職など、"揺さぶり
をかけられる仕掛け" には事欠かない。同じ組織、同じ業界・業種に人生を捧げるのは
危険なことだ。そして、われわれはもうすでに、十分に消耗している。

本業を「主戦場」にしないという選択

本業は、もっと控えめな存在でいい。

- ・社会とつながるための居場所
- ・現場感覚を失わないための足場
- ・自分が何者かを説明しなくて済む入口

その程度で、ちょうどいい。

社会そのものもまた、大きく変わっている。営利企業であっても、かつてのように利
益や技術のみを追求していればよい時代ではなくなった。地域との関係、倫理、説明責
任、継続性。こうした要素を引き受けなければ、企業は社会から受け入れられない。

つまり、本業とは、個人にとっても、企業にとっても、「社会との関係を引き受ける入
口」へと役割を変えつつあるのである。

入口はそのままに、役割を変えて生き延びる

私自身、「不動産屋」という入口を保ったまま、いわゆる不動産取引そのものからは距
離を取りつつある。口の悪い者は「うまくいかないからだろう」などというが、そう単
純な話でもない。むしろ、うまくいかない以外の理由が見つからないなら、かえってそ
の場にとどまることに固執してあがき続けるだろう。

「本業」に携わるうちに、制度と制度の間で噛み合わなくなった話を調整する仕事。立
場の違いから生まれる摩擦を和らげる役割。こうした周辺領域のほうが、自分には合っ